

論文内容要旨

報告番号	乙 総 第 2 号	氏名	花田 愛
学位論文題目	共創活動におけるグループワーク環境に関する研究		
<p>内容要旨</p> <p>本研究の目的は、共創活動におけるグループワークのコミュニケーションを活性化させるための環境デザインの要件を明らかにすることである。本研究では、この目的を達成するために、グループワークのツールや家具といった環境デザインについて検討を行う。</p> <p>ここに共創活動とは、人と人が集い、ある課題に対して、互いに意見を交わしながら取り組む活動を指す。ここでは共創活動の特に、グループワークに着目する。グループワークは、共創活動の中でも、少人数のグループで取り組み、ある課題にグループとしての考えやアイデアをまとめていく活動を指す。また、グループワークのコミュニケーションとは、グループワークにおいて、考えやアイデアをまとめていく上で交わされる、会話や表情、視線など相互の意思疎通や個人の意思表示を指す。</p> <p>現在、SDGsをはじめ多くの課題に直面する状況の中で、これらの課題への取り組みと共に、新たな価値創造が求められている。諸問題のより良い解決や新たな価値を生むために、共創活動は欠かせず、共創活動におけるグループワークは大変重要となる。</p> <p>このような認識の下、行為とツールや家具の相互関係を踏まえ、グループワークのコミュニケーションを活性化させる環境デザインの要件を明らかにするための実験を行った。本研究では、社会学や心理学の文脈で実施されるコミュニケーション分析の研究とは異なり、環境デザインの要件を見出すことが目的である。</p> <p>環境デザインを規定するものには、人々の行為と、人々が行為をする空間、そして人々が行為をする上で利用するツールの要素がある。グループワークの環境デザインを検討していく上では、行為と、人々が直接かかわるツールとの関係が重要になると考え、利用するツールによって人々の行為はどのような影響があるのかについて検証を行った。</p> <p>まず、グループワークのメンバーの位置やメンバーとツールとの位置関係といった「配置」に着目し、グループワークのコミュニケーションに関する実験を行った。そして、ツールそのものが行為に与える影響を明らかにするため「ツールの形状」に着目し、ツールの形状の違いがグループワークのコミュニケーションに及ぼす影響について実験を行った。さらに、ツールの形状による行為への影響を明らかにするために、「ツールの形状に伴う体位」に着目し、ツールの形状によって体位が異なることの影響について実験を行った。限られた条件ではあるが、客観的にグループワークのコミュニケーションを評価する指標に着目し、実証的に環境デザインの検討を行った。</p> <p>検討の結果、グループワークでの向き、ツールと家具レイアウトの関係、座席配置といった、配置の観点から、行為とツール、空間の相互依存性をとらえた環境デザインの必要性が示された。また、ツールの形状という観点から、テーブルの天板形状といった家具のデザインがグループワークに与える影響について明らかにした。ツールの形状に伴う体位に関して、立位でのペアタスクの有効性を示し、新しいグループワークの環境デザインの提案につながる知見を示した。</p> <p>新たな価値創造が求められている状況において、共創活動の重要性は高まっている。より良い共創活動のために、共創活動におけるグループワークのコミュニケーションは重要である。グループワークのコミュニケーションを活性化させる環境デザインについて、行為とツールや家具の相互関係を踏まえて環境デザインを構築することが必要であり、これらについての一定の知見を得ることができたものと考えられる。</p>			

論文審査の結果の要旨

報告番号	乙 総 第 2 号	氏 名	花田 愛
審査委員	主 査 田口 太郎 副 査 山口 鉄生 副 査 掛井 秀一		
学位論文題目 共創活動におけるグループワーク環境に関する研究			
<p>審査結果の要旨</p> <p>提出された論文は、人と人とが集い、互いに意見を交わしながら課題に対して取り組む活動である共創活動におけるグループワークのコミュニケーションを活性化させる環境デザインの要件を、ツールと家具を対象として、配置と形状の観点から実証的に検討している。</p> <p>本論文では、まず「向き」がグループワークの非言語コミュニケーションに大きな影響を与えていることをブレインストーミング的なディスカッションを通じた実験の結果から明らかにしている。次に近年開発が進んでいる ICT 機器についてもその配置による影響を検討し、ツールの使用については、ツールそのものが単独でもたらす効果を見積もるだけでは不十分であり、ツールを機能させるためにはそれらの配置への考慮も重要であることを示している。そして、ディスプレイの配置により視線を他のメンバーへ向けるという行為を誘発することが可能であることを明らかにしている。また、テーブルの天板形状について検討し、これまでは見映えや雰囲気など主観的な評価の対象であった天板形状の僅かな相違がコミュニケーションを交わす人々の心理に影響を及ぼすことを客観的に明らかにしている。</p> <p>ツールや家具を具体的にどのように活用することが共創活動に効果的であるかについての研究は十分には為されていなかったが、本論文ではツールや家具の配置や形状によりコミュニケーションが変化することを生理量などを用い定量的に明らかにしており、新規性が認められる。</p> <p>以上の研究成果は、いずれも日本学術会議協力学術研究団体である日本建築学会、日本オフィス学会および文理シナジー学会の学術誌に査読を経て掲載された5本の論文で構成されている。</p> <p>剽窃検知ツール iThenticate による本論文の Similarity Index は 2% であり、同ツールにより類似が指摘された箇所も定型文的な表現や自身の発表した論文の一部であった。よって、本論文による剽窃はないものと判断される。</p> <p>本論文は、共創活動で為されるグループワーク中のコミュニケーションに、ツールや家具が及ぼす影響を明らかにし、コミュニケーションの活性化に有効な環境デザインの条件を見出そうとするものである。</p> <p>本論文の結果からは、グループワークを行う環境のデザインには行為を介したツールと家具の相互依存性を踏まえる必要性、家具の形状の有する参加者への効果など、新たな環境デザインの提案に繋がる知見が得られており、これは学術的かつ社会的価値があるものと評価される。</p> <p>以上より、本論文は博士論文として一定の水準に達するものであり、博士(学術)の学位に相当するものと考えられる。</p>			